The Photographs of Jacques-Henri Lartigue
ラルティーグの写真

写 真 学 科
小 久 保　　彰

はじめに

この夏2ケ月間のフランス研修の折りにJ.H.ラルティーグ（Jacques-Henri Lartigue）の回顧展を見ることができた。特異な写真家として以前から興味を抱いていたが，約200点に及ぶ大回顧展のイメージの森をさまよいながら，新たにこの写真家の偉業を認識させられた。ラルティーグが他の写真家と決定的に異なる点は，生の悲しみや失望を決して写さなかったことである。人生の重さにではなく，軽みにカメラを向けてきた。楽しさだけを写し撮ってきた。従って，このイメージの交響曲のような回顧展から沸き上がり，響き渡るのは「生きる喜び」である。このラルティーグ回顧展の感銘を軸にしてJ.H.ラルティーグの本質について論じてみたい。

ラルティーグの原点

ラルティーグが生涯「素晴らしき人生」を写し撮ることができたのは，彼の性格と環境によるところが大きい。ラルティーグは裕福なブルジョアの家庭に生れ，家族や友人に愛され，フランスで最も華やかな，ベル・エポック期に多感な少年時代を過ごしている。このあまりに恵まれた環境が，彼を，カメラを持った「永遠の少年」にしたと思われる。ここにラルティーグの少年時代を，年譜風に列記してみよう。

1　乳母のデュデュ　1904

ラルティーグは1894年，父アンリ・ラルティーグと母マリー・アゲの次男としてパリ郊外のクルブヴォワに生れている。父は銀行家で当時新興のブルジョワジー。祖父アルフレッドは劇作家であり，同時に鉄道関係の発明家。兄モーリスも発明狂で，グライダーなどを造っている。父は子供た

ちと共に車の発明などをする家庭的な人物だった。ラルティーグはこうした環境で，家庭教師から教育を受けている。

1899年，ラルティーグ家はクルブヴォワからパリのエミール・オジェ通りに移る。

1900年，父の手助けでカメラのシャッターを切る。

1901年，ラルティーグ家は再び引っ越して，パリのコルタンベール通りの元貴族の私邸に移る。

1902年，父から始めて専用のカメラを与えられ，自分で現像を覚える。

1905年，一家はピュイ・ド・ドームの城を買取り別荘とする。

1906年，父は最初の自家用車，パナール・ルパッソール社の車を購入する。兄のモーリスがルーザ城の元醸成所で飛行機の製作をはじめる。

1911年，一家は再び引っ越し，パリの高級地16区の元貴族の邸宅に移住する。

1915年，ラルティーグは画家になることを志し，アカデミー・ジュリアンに入学。

こう記述してみても，ラルティーグは先取的な富豪の家庭に生まれた幸せな少年で，彼の言葉を借りれば，「どんな望みでもかなえてくれた」多趣味な父親の庇護のもとで豊かに成長していることが解る。6歳のラルティーグが父に買ってもらったボックス・カメラで，最初にレンズを向けたのは，家族とその周辺の人々である。彼が創ったのは完璧なファミリー・アルバムだった。少年は自分の生活している世界にしか興味を持っていなかった。彼にとって対社会という概念は晩年になっても存在していない。そして家族以上に熱中して撮影したのが飛行機，自動車，自動車レース，グライダーである。当時，これらの動力で動く機械はその黎明期だった。特に彼の兄が飛行機の発明狂であったため，飛行機と車の写真を数多く残している。

彼が動くものを好んで被写体に選んだのは，動きの瞬間を捉えることに魅了されていたからである。ユーモラスな『池の上のクッション戦争』(1907年)，跳ね降りる一瞬を捉えた『ビショナード』(1905年) など，動きのある写真を多数撮影している。なかでも傑出しているのが，写真を始めて2年目の作品『乳母のデュデュ』(1904年) だろう。彼の若い乳母が高々と上がったボールを仰ぎ見ている。のびやかな日常のある瞬間。この動きの捉えかたこそ子供の眼といえるだろう。ラルティーグにとって日々の生活が好ましく，すべてが楽しいのである。彼の写真はどれも人生を明るく受け止めていて，そこには悲しみも苦しみもない。映像に焼き込まれているのは，いつもラルティーグ少年のご機嫌な気分である。

ニューヨーク近代美術館の個展

ラルティーグが父からカメラを与えられてから，20万枚におよぶ写真が制作されていたにもかかわらず，彼の写真が評価されるようになったのは，ニューヨークの近代美術館で1963年に催された『ジャック＝アンリ・ラルティーグ展』からである。なんと60年間，発表もされず評価もされなかった。この時ラルティーグは68歳であった。彼の写真が長い間評価されなかったのは，ラルティーグ自身，自分を画家で，写真家とは思っていなかったことによる。写真を公の場で発表する意思がまったくなかった。彼は，写真はあくまで自分の楽しみのために撮るものと考えていた。彼の写真が高い評価を受けなかったもうひとつの原因は，彼が社会派でも芸術派でもない，アマチュア写真家と考えられていたためである。確かに彼はアマチュアだが，アマチュアでなければ捉えることのできない，「生きる喜び」を表出させている写真家である。

ラルティーグの偉業は，まだ息を止め正面を見つづける肖像写真の時代に，動いている一瞬を捉らえ，自由に転換して新しいヴィジョンを開発していることであろう。これらの新しいヴィジョンは少年のういういしい好奇心から生まれたものである。この感性をラルティーグは晩年まで持ち続けていた。彼の写真の原点が，いかにそれを始めた頃にあるかを，この個展のディレクター，ジョ

ン・シャーコフスキーが「カタログ」の中で論証している。やや長くなるが引用してみよう。

「(発明一家のなかで)，ジャックの発明品は彼の瞳だった。彼自身の記憶によれば，5歳の時，カメラを使わない新しい写真術を発見したという。『夏休み，兄と彼の友達の遊びに加わるには幼すぎたので，ぼくは見物していた…彼らは，球投げをしたり，逆立ちしたり，ハンドルの付いた車でオートレースをしたりしていた。

ぼくはただの見物人だった。だが，密かに，ぼくは一人ですごい発見をしていた！　ここと思った時，自分の眼を閉じたり開いたりすることで，おもしろい映像をなんでも捉えることができるのを発見したのだ。時々，ぼくの大切なコレクションに新しい映像を加えていると，兄は急にぼくのほうを見て，どうしたんだい，と聞いたものだ。ぼくはバカみたいにぼーっと突っ立ていたから。

これは世紀の大発見だった！　ぼくはそれを完璧に捉えていた。その色！　その音！　その大きさを！』

翌年，彼は椅子に乗って三脚上の大きなカメラを覗きながら，始めての写真を撮った。しかしレンズが開いている間，被写体は動いてはならなかった。

『…だったら，自転車レースをどうやって撮るのだろう？　ジャンピング競争や，ボートレースや，ぼくたちの目の前に毎日現れてくる新しい発明品を，どうやって？』　次のクリスマスに，ラルティーグは明るいレンズとシャッターの付いた新しいハンドカメラを貰った。これこそ彼の欲しかった“映像の捕獲機”だった。

10歳前に，ラルティーグは，一世代後に高性能の小型カメラで撮影されるようになる，驚くほど先駆的な写真を撮っている。

この子供の仕事の視覚的特性－その驚くべき強さと効果は，計画性を持った意識的行為の産物だとはとても信じ難い。むしろこのように極端に新しい仕事は，伝統や機種の特性などということになんの恐れも感じない，本当に素朴な人によってのみ成されるのではないか。たぶん，非常に才能のある一人の子供だけが，誰にも教えられず，これらの作品を半世紀も前に作ることができたのだろう」

シャーコフスキーは，ラルティーグの写真が彼の少年期といかに密接な関係があるかを論じているが，この点に関しては，1911年に記された彼の日記からも指摘できる。彼の写真が無邪気な雰囲気を漂わせているのは，いつまでも少年のやわらかい心を持ち続けていたからだと思う。

「成長する自分に，ときどきひどく悲しくなる。こんなに幸せで，若く，何の不安も抱かずに暮らせるのに，なぜこのままでいられないんだろう。

もっと若くたっていいとさえ思う。

ママンが「あなたはいつまでも私の赤ちゃんよ」というときの声や優しいまなざしをどう説明したらいいだろう。

永遠にそういってもらえたらどんなに素敵だろう。

幼い頃を思い出す。

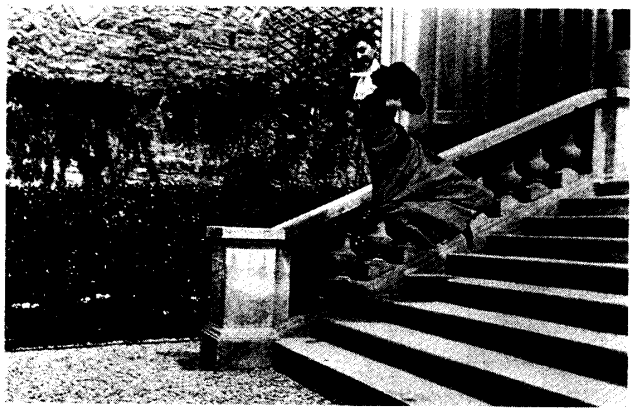
夜眠ると，自分を守ってくれている幸せが逃げてしまいそうで怖かった。

手を握って，ママンが歌をうたってくれているあいだも，僕は喜んでいたのではなく，じつは声を殺して泣いていた」(堀内花子訳)

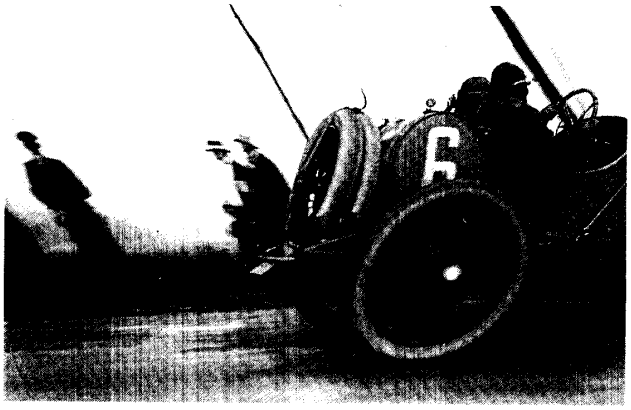
この詩のような日記から彼の幼児性を指摘することは容易だが，この無垢な感性を決して失わなかったからこそ，彼の写真は無邪気な輝きに満ちているのである。

写真集『1世紀の日記』

1963年に開催されたニューヨーク近代美術館の『ジャック＝アンリ・ラルティーグ写真展』の後，ラルティーグは『家族のアルバム』(1966年)と，『1世紀の日記』(1970年)の2冊の写真集で，世界を代表する写真家として脚光をあびるようになる。近代美術館での個展が起爆力になっているのは事



2　ビショナード　1905



3　自動車クラブのグランプリ　1912

実だが，この時の作品総数は42点にすぎなかった。しかし『1世紀の日記』には初期の作品とともに1930年以降に撮られた作品も多数収録されている。興味深いのは，この写真集の作品選考にベア・ファイトラーと共にリチャード・アヴェドンが当たっていることだ。アヴェドンは「解説」まで執筆する熱の入れようである。アヴェドンといえばファッション写真家として世界屈指の写真家であり，シリアス写真家としても『アメリカン・ウェスト』をはじめ数冊の写真集を出版しているアメリカを代表する写真家である。アヴェドンは，今まで考えたこともなかった異質の写真をまえにして，その磁力に圧倒されてしまった。アヴェドンは職業写真家である。職業写真家は仕事として写真を撮る。しかし，自分の楽しみのためだけに写真を撮る写真家がいるのだ。そしてその作品は，職業写真家では決して捉えられない「日々の喜び」に輝いている。アヴェドンはラルティーグの作品に深い感銘を受けると同時に，羨望の念を禁じ得なかったろう。

写真集『1世紀の日記』は家族の写真，ブローニュの森の着飾った貴婦人たち，発明狂の兄モーリスと黎明期の飛行機，自動車，オートレース，グライダーの写真，コート・ダジュールなどの海浜で海水浴をする人々など，ラルティーグが最も好んだテーマが適格に編集されている。

このなかで特に目を引かれたのは，オートレースなど，走行中の車を撮影した作品である。走る車が流し撮りされている。これは，この種の表現技術の先駆的なものであろう。この技術について彼は，「この場面はどうしても撮りたかった。それだけだ。どうしても撮りたかった。ただ当時のカメラやフィルムでは，こんな風にしか写せなかったんだ」と答えている。流し撮りという技法があったわけではなく，どうしても撮りたいという高揚した気分が，たまたま流し撮りになったのだろう。

アヴェドンはポーズと動きの写真家だけに，ラルティーグの家族や周囲の人々がごく自然に，魅力的な動きを示している写真に注目している。彼は，ラルティーグが動きの瞬間をどのように捉えたかを，目撃談として語っている。アヴェドンは一夕，ラルティーグと彼の妻フロレットを自宅に招いてご馳走したことがある。みなよく飲み，笑い，話に興じた。そして，パーティーが最高潮に盛り上がった時，

「突然，ラルィーグは上機嫌で人参をかかげて乾杯し，私たちの健康を祝した。私も答礼の乾杯をしようと人参を手にとった。そして手を高く掲げた瞬間，彼のカメラが現れて…カチッ。人参で乾杯している私の写真が撮られてしまった！」

この経験から，ラルティーグの階段を跳ね降りているユーモラスな女性の写真を，アヴェドンは，まず，ラルティーグが階段をぴょんぴょん飛び下りて見せる，つられて女性が跳ね降りた時，すかさず彼はカメラを構えたのだろう，と解説している

ラルティーグについてのアヴェドンの説

こうしたエピソードを前置きにして，アヴェドンはラルティーグの写真について，こう核心に迫る。

「ラルティーグは，彼の先輩や同時代の写真家たちが伝統を造り，あるいはそれに従っている時，写真家の誰もやらなかったことをしていた。自分自身の生活を撮っていたのだ。彼は本能的に，物事の本質はごく小さなところにあることを知っていた。それは一種の叡智というべきもので，鍛練で得られるものよりずっと深く，しばしば鍛練で損なわれるものだが，彼は決してこの叡智を失わなかった」

「本質はごく小さなところにある」という言葉は，アヴェドンの実体験からでたものだろう。

ところで，ラルティーグは近代美術館の写真展と『1世紀の日記』が刊行される間の1964年に，ニューヨークのネドラー・ギャラリーの絵画展に油絵を出品している。彼は写真はあくまでも趣味で，自分は美術家であると思っていた。では，どのような油絵を制作していたのだろうか。興味深いが，そのほうの資料はほとんど無い。少ない資料で知る限り，おもに花や人物を描いているようだ（晩年は抽象画も描いている）。その一枚，大きく花が描かれている作品を写真で見たことがあるが，美術史を震撼させるような磁力は，残念ながらない。ラルティーグは写真と絵を抱えてベル・エポックの輝く時代を通過している。しかし，子供のような無垢なまなざしで風俗や時代を眺める写真のほうが，彼には向いていたようだ。絵画は時代というものを表出させにくいメディアである。

アヴェドンはラルティーグの写真を，「本質はごく小さなところにある」と解説した。アングルは違うが，写真について評論を残しているフランスの思想家ロラン・バルトは，やはり写真の「小さいところ」の大切さを指摘している。ロラン・バルトは写真をストゥディウムとプンクトゥムに分類している。ストゥディウムはある広がりを持つ情報としての写真である。政治，経済，社会，事件などに関するあらゆる一般的な写真がこれに当たる。それに対してプンクトゥムとは本来，刺し傷，小さな穴，小さな斑点，小さな裂け目のことで，それが存在するだけで，読み取り方が一変するような「細部」をもった写真のことである。現に眺めている写真が，この「細部」のために新しい写真となって，私たちの眼により高い価値を帯びてくるのである。

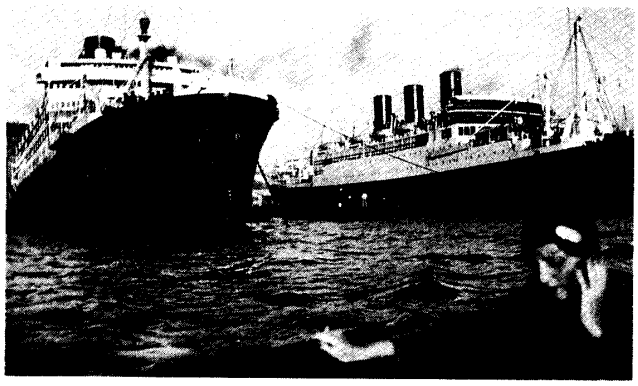
ラルティーグの写真はアマチュア性がダイレクトに被写体に向かうために，一見破綻してるような映像の中に，「細部」がいきいきと存在している。アヴェドンの言う「本質は小さなところにある」，バルトの「それが存在するだけで読み取り方が一変する」ような「細部」が，ラルティーグの写真には確かに存在している。

夢の女性たち

写真は，それが撮られた時点では人々にさまざまな情報を訴えかける。しかし時間が経過すると写真からは情報が消えて，その時代のポピュラーイメージが炙り出されてくる。イメージがイメージとして自律し，私たちに郷愁（ノスタルジア）として戯れる。

ラルティーグの過去の写真は，ノスタルジアとして私たちを魅了する。彼が愛した女性（みな美人！）の写真は，その時代の雰囲気をまとって，見るものには「夢の女」として現れる。ラルティーグはさまざまな遊びに加えて，飛行機，グライダー，自動車，自転車作りに熱中しているが，なかでも情熱を傾けたのは女性である。彼の写真に登場する女性たちはみな彼が愛した女性たちだ。どの女性も夢の女としてたおやかな光沢を放っている。

まず彼の少年時代，1904年から13年頃までの写真に登場してくるのは，親戚の娘のシモーヌである。幼馴染みの少女を意識しはじめ，恋が芽生えてくる。「夜，シモーヌとふたりだけで散歩（略）ぼくの心臓は嬉しくてはち切れそう。忘れるはず



4　ビビ　1928

はないから日記に記録する必要はなし」

彼はシモーヌも自分を好きだと信じていたが，彼の友人とあっさり結婚してしまう。シモーヌの写真は，彼女と結婚相手のシャルルがスケートをしているところで終焉している。

1915年，20歳のラルティーグは，始めて女性とベッドをともにした。相手は国民的アイドルの歌手，マルト・シュナルである。彼はその夜のことをダイレクトに日記に書いている。しかし彼女の写真がごく少ないところをみると，束の間の恋であったようだ。

1918年に登場するのが有名なオペレッタ作曲家の娘マドレーヌ・メッサジ，愛称ビビ。ブローニュの森で知り合い，カンヌで再会する。翌年結婚。彼の愛した女性のなかでは最も多く写真が残されている。下着やバスタブの中などで写されているものなど，よりプライベートなものが多い。新婚旅行の時の，便器に腰掛けている彼女の写真はよく知られている。二人の子供をもうけるが，ビビの不倫によって破局。

1930年，ルーマニア生れのモデル，ルネと恋に落ちる。個性的な彼女のポートレートが多数ある。

1934年，マルセル・パオルッチ，愛称ココと結婚，カジノで働いている電気技師の娘である。ココは15歳年下だった。1937年離婚。

1942年，フロレットと知り合う。その時手を見て，彼女を「ヴァンプの手をした田舎娘」と称している。彼女の父はタクシー運転手，母はお針子だった。1945年結婚。

ここでニューヨーク近代美術館の『ラルティーグ写真展』のカタログにもどる。このカタログとパリの『ラルティーグ回顧展』では印象がどこか違っている。パリの写真展では時代の息吹，ラルティーグの体温，そして「生きる喜び」がイメージの森として伝わってくる。しかし，ニューヨーク近代美術館のカタログは緊張感はあるが，端整で冷たい手触りを感じる。これはヴィンテージプリントと印刷の違いだけではなさそうだ。ニューヨーク近代美術館のカタログをつぶさに見て気付いたことは，こちらは42点という限定された枚数で構成されているため，シリアス写真の鑑識眼で，極めて完成度の高い写真のみが選ばれていることである。これは写真の権威である世界的な名ディレクター，ジョン・シャーコフスキーの予期せぬ誤謬ではあるまいか。やはり，ラルティーグの写真は，既成の写真を超え，子供の無垢な眼で捉えた「生きる喜び」が伝達される構成が必要だろう。

参考文献

1　The Photographs of Jacques-Henri Lartigue
The Museum of Modern Art, New york 1963
2　Lartigue Diary of a Century
The Viking Press, New york 1970
3　Jacques-Henri Lartigue
Pantheon Books, New York 1986
4　「ラルティーグ写真集」　愛のまなざし
ルブロポート 1994
5　「ラルティーグ写真集」　子供のまなざし
ルブロポート 1994
6　「ラルティーグ写真集」　時のまなざし
ルブロポート 1995
8　カメラ毎日　1971年6月号
毎日新聞社
9　明るい部屋　ロラン・バルト
みすず書房 1985